

入選

テーマ：医療と福祉、わたしの体験
「幸せとは何か―障がい者と仕事―」

東京都・女子学院高等学校1年 佐原智帆

障がい者は私にとって生きることや働くこと、人間の幸せとは何かについて考えさせ、気づかせてくれる存在であると思う。

私は夏休み、ボランティア活動に参加した。私が訪れた施設は、知的障がい者や精神疾患のある方々が自立や社会復帰に向けて利用している施設だった。その一日は、利用者の日直が点呼を取ることに始まり、当番制で掃除や雑用を行う。そしてイベントやバザーの際に販売する物、例えば割りばし入れ、キーホルダー、たわしやだるまなどの製作を行う。利用者が活動に参加し、仕事がこなせた時、シールをもらい自分のカードに貼り貯めていく。うれしそうにカードを見せてくれる姿を見て、このカードが施設の利用者の方々の張り合いになっていることを強く感じた。

知的障がい者は、初対面の人に対して緊張したり、パニックを起したりすることがあるという。私自身のように接したらよいか初めは困惑したが、同じ品物を作り出すために、お互い理解しあえないことを気まずく思いながらも意思疎通を図ろうと努力した。さまざまな表情のだるまをおのおのが作り、それと同じ表情をして見せ合うなどし、そこに会話が無くても自然と皆の中に笑顔がこぼれていった。そしてだるまが増えるに従い、そこにいる人達の気持ちを通じ合い、皆で共に作業を続けることの楽しさを感じ、わずかずつでも心のつながりが構築されていった。私はこのようにつながりがあると大事で、そしてどんな人にとっても目的を持ち、周りの人と協力し何かを行うことは幸福を感じさせると気づいた。それが仕事につながればより素晴らしいと思った。

人が働く理由は生きていくのに必要なお金を稼ぎ、社会貢献をするためでもあるが、自分の存在価値を見出し幸福を得るためでもある。

人間の究極の幸せとは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人に必要とされることの四つという話を聞いたことがある。働くことによつて愛以外の三つの幸せは得られるのだ。

最近、日本理化学工業というチョークを作る会社をテレビで知った。この会社は、長年障がい者雇用を続け、業界トップシェアを成し遂げた。おのおののできることに合わせ、仕事をスムーズに行えるような細かい配慮、そして生き生きと働いている障がい者の方々の笑顔を見た。障がい者と言っても、正確に作業を行う能力は健常者よりも高い。懸命に働く姿は、福祉施設にいたほうが彼らは幸せではないかと思っていた私にとつて衝撃だった。労働＝苦役と思っていたからだ。しかし人間の究極の四つの幸せの話を知り、施設内で守られて何もせず過ごすことが幸せなのではなく、社会の中で褒められ、必要とされ、人の役に立ち、自立することこそが幸せなのだと思んだ。

生きていて意味の無い人間など一人もいない。重度障がい者であっても、それぞれが必ず誰かに寄り添い寄り添われ、必要とされている。憲法13条には次のようにある。「すべての国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」。

福祉という漢字を辞書で調べた。福と祉、共に「しめすへん」がつき、神が人間を幸せにする恵みを与えていることを表している。「福」は、神が人間が生きていく上で食べていくのに困らない幸せを与えていることを表し、「祉」は神が人の心にとどまって心を幸せにすることを表す言葉。人間の幸せには物に不自由しない幸せと心が満たされる幸せの二つが必要なのだ。

いろいろな人々が互いを認め合つて生きる社会。そんな社会こそ平和というのだろう。新約聖書、マタイによる福音書5章9節に「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」とある。働く幸せを教えてくれる障がい者が世の中の光となり、健常者と共に平和を実現する社会になることを願う。